

きどきこる打そへ給へる。さきくさのするつかた、いとなつかしうめでたくきこゆ、なにごともしいらへ。玄給御ひかりにはやされて、色をも音をもますけぢめ、ことになんわかれける。

〔河海抄初音〕けふは、りんじかくの事にまぎらはしてぞおもがくし給。臨時客とは、攝政關白の亭に、年の始上達部を招て遊をいふ也。またまれる公務ならねば、臨時客と號ル歟。自餘をば大饗と云、中宮東宮并左右大臣也。執政臣朱器の饗を設を臨時客と云、自餘の様器饗を大饗と云也。是も源氏執政の故也。朱器饗をまうけられたる故に、臨時客と云也。大饗事、正月二日二宮大饗、中東關白臨時客、四日左大臣饗、五日右大臣饗、謂母屋饗、大臣初任謂庇饗。

〔岷江入楚^{初音}二十三^少〕河海説アヤマレリ、大饗ハ毎年正月ニ三公各コレヲ給フ、其時ハ請客ノ使ナドアリテ、客人ヲ殊更招請シテ、藤氏ノ一大臣ハ氏長者タルニヨツテ、朱器臺盤ヲ氏院ヨリワタシテ是ヲ用イル也。自餘大臣ハ赤木クロ木ノツクエ様ノ器ヲ用也。尊者アリ、鷹飼ナドワタル儀アリ、臨時客ト云ハ、正月二日三日ノ間關白大臣ノ亭へ客人ノフト來レルヲ云、サテ臨時客トハナヅクル也。其時ハ臺盤ナドハ用ヒズ、ヲシキ高ツギヲスユルナリ、催馬樂朗詠カタスギナドアリ、樂器ヲメサズ、笏拍子ニテウタフ物也。源氏君太政大臣タルニヨテ、臨時客ノ事攝政ノ臣ノ如シ。私年中行事秘抄云、正月二日關白家臨時客事云々。花鳥ト、根元抄ト相違花鳥ノ時シルシ改ラル、歟。^{○中}玉云、客、キヤクトヨムベシ、一勘、臨時客ハ攝關家ニテノ名目也、但六條院ハ大臣ナガラ執政ノ職ヲモ兼タル程ナレバ、ナズラヘテイヘル也、一勘。^{○中}臨時客ニハ、樂器ヲ用ズ、郢曲ノ人笏拍子にてうたふ也、然共此臨時客ニハ大饗の例になすらへて、笛の筥などをめし出したるにや、物のまらべといへるおぼつかなし、但物のしらべトハ、音曲につきて時の調子をも云べし、樂器の有無にはかゝはるべからず。

〔小右記〕長和三年正月二日己丑、依物忌、不參左府。^{○藤原道長}之由、示送左宰相中將許、給於隨身并番長